命ある全てのもの達へ

但野 尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命ある全てのもの達へ

【Ｎコード】
Ｎ５５５９Ｚ

【作者名】
但野　尚

【あらすじ】
異世界へ「勇者」として召還された大量のアジア人種。「世界を破滅から救うため」という大義名分のもとに行われた召還は本当に正義だったのか？
多分チート無し、コメディ無し、シリアスというよりひたすら暗い話しになりそうな気配。

プロローグ（前書き）

※注意※大規模災害の描写があります。読みたくない方は飛ばしてください。

プロローグ

「そのとき」に関する記憶は酷く曖昧だ。
特に「そのとき」の直前まで自分がどこで何をしていたか、ほとんど思い出すことができない。

「そのとき」、一瞬にして世界は崩壊した。
何の前触れもなく大地が鳴動し、人も建物もカクテルシェーカーの中の氷のように振り散らかされた。
そして……信じられないほど大量の海水が、圧倒的な破壊力を持って全てを押し流す。
息も出来ず、洗濯機の中の古タオルよろしくもみくちゃにされて、上下左右の区別もつかないまま途切れる意識……

次の記憶は揺れる船の上。
ぴしゃぴしゃと頬を叩かれ重いまぶたをあげると、突然、目の前に突き出される異国人の顔。

「……！」

解らない言語で何か叫んでいる異国人の、それでも表情はぱっと明るくなる。
やや遅れて、似たような容貌の異国人がわらわらと集まってきて、顔を拭かれ、温かいものに全身を包まれる。
そっと上半身が持ち上げられ、温かい飲み物が差し付けられて、そ

れに反射的に口をつけると、周りからホッとしたようなどよめきが漏れた。

飲み物の器越しに暗くうねる海が見える。
波間に浮かぶ大量の瓦礫の中には燃えているものもあり、その明るさが照らし出す海面には、夥しい数の人間の肉体がそこかしこに漂っている。

異国人たちは手に手に長い棒を持ち、船の縁から暗い水面を探りながら、大声で叫び続けている。時折、引き上げられる人間もあるが、やがて頭まで大きな布に包まれて、整然と甲板に並べられていく。
さして大きくない船の上は、そろそろそをな包みでいっぱいになりそうだ。

……どうやら、大規模な災害が起きていて、異国人たちはその対応に追われる救助隊であるらしい。
そう思い至ったのは、捜索を断念したのであろう船が陸地へ向けて転進した時だった。

それにしても、どこの国の救助隊だろうか。
聞こえてくる言葉は少なくとも英語ではない。
服装も、救助隊や軍隊というよりはむしろ宗教的な、あまり活動的とは言い難い裾長いものだ。

横でさかんに話し掛けてくる異国人が、ふと思い出したように荷物の中から輪のようなものを取り出して頭にのせてくる。
額にヒヤリと金属が触れたとたんに、それまで全く理解不能だった言語が日本語に変わる。

「ごめんなさい、気がつかなくて。不安だったでしょう？もう大丈夫ですよ」

頷いてみせると、異国人は安心したように笑った。
怪我はないかたずねられて首を横に振ると、与えられていた飲み物をもっと飲むよう勧められた。
気持ちが落ち着くからと言われた事や、その後の引きずり込まれるような眠気を考えると、どうやらあの飲み物には鎮静剤の類が入っていたのだろう。その作用で多少の逆行性健忘が起きていたのかもしれない。

意識が遠のいていく最中、異国人たちの誰かのつぶやきが妙に耳に残った。

「……今回は大量だったな……」

災害の大きさに戸惑う救助隊員のつぶやきとして、その時はあまり気にならなかった一言。

しかし後に思い出した時、ふと内臓を鷲掴みにされたような気分にとらわれる。

あの言葉にはもっと別の解釈があるのかも知れないと。

動揺（前書き）

誤字脱字、用語の間違いなどありましたらご教示ください。

動揺

時系列がはっきりしている記憶は「避難所」から始まる。

遠くから聞こえてきた潮騒が次第にざわめきに変わり、やがて不特定多数の会話だと認識できるようになる頃。

深い海の底からゆらゆら浮かび上がるように、少しずつ、少しずつ意識が鮮明になる。

まぶたの向こうが明るくなり、それが木洩れ日のようにちらついている。

周囲でにわかに人の動きが増えたことが、背に響くかすかな振動から感じとれる。

名前を呼ばれたような気がしてまぶたを開いてみると、目の前には高い高い石造りの天井。

身体にかかる薄い毛布をはねのけておそるおそる起き上がれば、病院の入院患者用ベッドのように飾り気のないシングルサイズのベッドの上だ。

「……ここは、どこだ？……」

見渡せば周りは体育館ばりに広い空間で、同じような病院ベッドが一面にびっしりと……ざっと見て５０床以上はある……並べられ、そのひとつひとつに人間が寝かされていた。

中には起き上がっていたり、ベッドに腰掛けているものもあるが、全ての人間に共通するのは黒眼黒髪であることだ。

恐らくほとんどが日本人……少なくともアジア系黄色人種の集団が、ほぼ全員貫頭衣のような簡素な服を着せられて、ベッドについてい

る。
そしてベッドの間の狭い空間を、純白のローブをまとった白色人種と思しき集団がせわしなく歩き回りながら、ベッド上の人間を覗き込んだり話し掛けたりしている。

野戦病院？
もしくは兵舎？
……まさか……強制収容所？

軽いめまいに片手で顔を覆うと、指先に金属が触れる。
手でなぞり、両手で確かめると、額のまわりに細い輪がはめられていた。

……あ……

ふと蘇る船上の記憶。

そうだった。
自分も保護対象……被災者とか傷病者と呼ばれるべき人間なんだ。
ということは、ここは避難所とか病院、多人数を収容するための大規模保護施設の類だろう。

船上では自分以外に生存者はいないのかと絶望的な気持ちでいたけれど、こうして見るとけっこう助かっていたんだなと胸を撫でおろしていたところに、白いローブの男達が大声で呼ばわりはじめる。

「まもなく召還の儀が始まります！動ける方は手荷物を持って、誘導に従って移動してください」

召還……って何だ？
聞き慣れない言葉に首を傾げながら枕元に置かれた布袋を覗くと、中に衣服や財布、携帯など身に着けていた物が入っている。
周囲の人間がもぞもぞと動き始める中、強張る身体を無理やり伸ばし、ベッドから抜け出して袋を背負った。

ローブの男達の誘導に従って歩くのは、皆、自分と似たような者ばかりだ。
ほとんどが十代後半からせいぜい三十代の男。
皆一様に疲れて、生気のない顔つきをしている。
被災直後ならばそれも仕方がないのだろうが、何というか、それだけが原因とは思えない、不自然な活気の無さが気になった。

動揺（後書き）

２０１１年１２月１９日　投稿

召喚（前書き）

誤字脱字、用語の誤用などありましたらご教示ください。

召喚

ローブの男達に導かれた先は、「避難所」よりさらに広い空間……ドーム球場並みの広さと高い丸天井を備えた、やはり石造りの巨大なホールだった。
丸天井の半分以上は華やかなステンドグラスに覆われ、そこかしこにシャンデリアが輝く、金色の装飾も煌びやかな豪華な空間は、教会とか大聖堂などと呼ばれる施設をやたらと巨大にしたように見える。
中央にひときわ高い祭壇があり、その上には白を基調にしたこれまた豪華な衣装に身を包んだ老人が佇んでいる。
髪も髭も見事な銀色の老人もまた、ローブの男達と同様に明らかな白色人種で、明らかに政治的もしくは宗教的に高位にある人物だと見てとれる。

祭壇を取り囲むように並ぶ簡素な長椅子に誘導されて、次々と黒眼黒髪の人間が座らされていく。
四カ所の入り口から川の流れのように続く人波は、いつまでもだらだら続き、なかなか途切れる気配が無かった。

目測でざっと千人近くにはなるだろうか。比率はおよそ男9に対し女1と圧倒的に男が多い。
経験上、災害時の生存者は女が若干多いものだが、珍しいこともあるものだ。それに子供の泣き声も聞こえず高齢者の姿も無い。
もしや女子供は別の施設に収容されているのだろうか。

予想以上に生存者は多かったのだと喜ぶ反面、入り口付近から長椅子にかけて立ち並ぶローブの男達に違和感を覚える。
「避難所」にいた男達と服装は同じなのに、放たれる雰囲気があか

らさまに剣呑だ。
何が違うのかと目を凝らすと、彼らはすべて長短様々な棒や杖、槍や剣を所持して武装している事に気付いた。
背中が嫌な気配にざわついた。
なぜ、今、この状況で武器が要るのか？
周りの人々も落ち着かない様子だ。
ただ単に右も左もわからずに不安がっているだけの者が大半だが、中には武装兵の存在に気付き、彼らから視線が離せない者もいる。
もし誰かが悲鳴でもあげたら、パニックが起きてもおかしくない……そう思った頃、祭壇上から深みのある声が響きわたる。
「静粛に！」
両手を大きくひろげて、歌うように老人が続ける言葉に、ざわつく空間が水を打ったように静まった。
「世界に選ばれし勇者諸君！はるばる異世界より来たりし我らの救世主達よ！ようこそ、聖王都へ！」
……は？
思考が止まる。
今、彼は何と言った？

勇者？
救世主？
……異世界？

「突然このような異世界に召喚されてさぞかし戸惑っていよう。なれど我らの世界は崩壊の危機にあり、これを救えるのはそなた達、異世界からの勇者をおいて外に無い！」

一旦静まり返っていた空間は、それまで以上の喧騒の渦に叩き込まれた。

召喚（後書き）

２０１１年１２月１９日　投稿

魔素

いきなり召喚とかどういうことだ？
勇者って、まさか魔王と戦えと言うんじゃないだろうな？
異世界とは、ではここは日本ではないのか？というよりむしろ地球上ですらないのか？
元の世界に帰してくれ！
そもそも元の世界はいったいどうなってしまったのか？
家は？家族は？友人は？恋人は？

いったい自分たちはどうなるのか！？

誰もが、思い思いの疑問や不安を負の感情と共にぶちまける。喧騒はほどなく怒号になり、立ち上がって叫ぶ者や地団駄を踏んでいきり立つ者達でホールが揺れる。

興奮した数人が席を立ち祭壇に駆け寄ろうとするのを、すかさず武装兵が通路に散らばって制し、座席へと乱暴に押し戻した。
鈍い殴打の音やくぐもった悲鳴も混じって聞こえる。
兵が興奮した「勇者」に対して、ためらいなく暴力を使ったのだ。

仮にも「勇者」と呼んだ者に対するにしては、武装兵らの行動は少しばかり横柄に過ぎる。

単純に怒りの表出だった怒号が弱まり、不審と脅えを含んだざわめきに切り替わる。そこへ、

「……皆様……」

か細く震えるような、若い娘の声が響きわたった。

気がつくと、祭壇上の人物は銀髪の老人から美しい少女に入れ替わっていた。

むきたまごのように白い肌に金色の長い髪を垂らし、向こうが透けて見えるほど薄い生地のドレスと大量のアクセサリーのみを身に着けて、祭壇上の少女はぶるぶる震えていた。

羞恥心からかほんのりと頬を紅潮させ、薄い生地を通して乳首の勃起や性器へと繋がる発毛の形までが透けて見える姿は、「勇者」達……特に年若い男性の……を黙らせるには十分な威力があった。

何度かためらう仕草を見せた後、少女は覚悟を決めたように顔をあげ、まだ震えながらも先ほどよりは大きな声で話し始めた。

「皆様、突然このような異世界に呼ばれてしまい、さぞかし驚き混乱していらっしゃることでしょう。まずはその事について、聖王家の一員として深くお詫びいたします」

優雅な動作で少女は深々と頭を下げた。

「勇者」達が戸惑うほど長い間頭を下げ続けた少女は、再び顔を上げた時には完全に羞恥心から脱出して、すっかり王家の一員らしい威厳のようなものを纏わせていた。

少女はエリューセラ王女と名乗り、聖王国の次期王位継承者にして国教会の最高位巫女であると付け加えた。

彼女こそが今回の「勇者」大量召喚の総責任者だと判明して、再び場内は騒然となったが、武装兵のひと睨みで収まった。

ひと呼吸おいて、王女は今回の召喚について説明を始める。
この世界がいわゆる「剣と魔法の世界」であること。
世界を構成する基本となる「魔素」なるものが存在し、あらゆる生命活動を支えるエネルギーとして世界を循環していること。
しかし、この魔素を一方的に食い荒らして不当に溜め込む「魔獣」と呼ばれる生き物が大量発生しており、魔獣の増殖に伴って世界から急速に魔素が減少し始めている。
このまま魔素が枯渇してしまえば、森は枯れ人も獣も死に絶えて、世界から多くの命が失われてしまう。
一方、魔法の存在しない異世界の人間は、魔法が無い世界で生まれ育ったが故に体内に非常に多くの魔素を持ち、また世界から魔素を体内に取り込むことに優れている。
魔素を変換する力を持つ「魔晶石」を介することで、体内に有り余る魔素を強大な魔法に変換することができるし、また肉体的にも頑健で技術の習得にも優れている。
この世界の人間の誰よりも優れた戦士となる可能性を秘めた異世界人の力をもって、増え続ける魔獣を倒し、不当に溜め込まれた魔素を再び世界に解放し、この世界を滅亡から救って欲しい、と。

「皆様には不本意な形で戦いに巻き込んでしまう事になりましたが、私たちはもう皆様の優れたお力に頼るよりほかは無いのです。どうか、どうかこの世界をお救いくださいませ」

王女は再び深々と頭を下げた。
先ほどは身体を覆い隠していた両手は、今度は大きく左右に広げられ、片足を後ろに引いて腰を屈める、ちょうどバレリーナが舞台挨拶をするような礼である。
透けるドレスの中で豊かな乳房がたわわに揺れ、おそらく前の席についている者達には女性器すら丸見えだろう。

扇情的ともいえる美少女の一礼に、ホールはしんと静まり返る。
隣の若者のゴクリと唾を飲み込む音まで聞こえる程だ。

魔素（後書き）

２０１１年１２月２９日投稿

従者

王女の説明は続く。
「勇者」をいきなり魔獣との戦いに放り出すようなことはしない。
装備も宿舎も国が支給するし、十分な訓練を積んだ上で戦いに臨んでもらう。
倒した魔獣が落とす魔晶石は、安定した価格で国家が買い取る。
相応の強さの魔獣を一定数以上倒した者には、国家から称号を送り、さらに戦功著しい者は貴族に取り立てることも可能である。
貴族ともなれば王族との婚姻も有り得る……そう言いながら王女が微笑むと、一部の男達から歓声が上がった。

とにかく、「勇者」に対して全国民ができる限り最大の便宜をはかるよう周知徹底する。
その手始めとして、全ての「勇者」に対して従者を支給する。

王女が合図すると、先ほど「勇者」達が導き入れられた四つの入り口から次々と人間が入ってきた。
金や銀の髪を持つ全般に色素の薄い人間達……その大部分が女性で、まだ年端もいかない幼女からまさに今が女盛りの肉感的な美女まで、柳腰あり巨乳ありと様々なタイプの美しい女たちがぞろぞろと、祭壇を後ろから取り巻くように導き入れられた。
女性よりはるかに数は少ないが、やはり色素の薄い男性達……中には天使と見紛う美少年や、ギリシャ彫刻のような美青年、ボディビルダーのような美丈夫達があとに続く。
召喚された「勇者」の倍以上の人数が祭壇の後ろに整列し終わるには、かなりの時間を要した。

どことなく王女と似通った身体的特徴から見て、彼らもこの聖王国の国民なのだろうが、誰もがかなりの水準の美男美女で、全員がやたら露出度の高い……ほとんど局部しか隠せていない、水着のような衣装を身に着けていた。

「彼らには皆様の忠実な従者として、皆様のどのような命令にも喜んで従うように十分教育を施してあります。また皆様が身に着けている魔道具との契約によって、皆様のどのような命令にも従者は逆らえない仕組みになっています」

「どのような」の部分を王女は不自然なほど強調した。

「召喚の際、たまたまあちらの世界は大災害に見舞われており、その自然エネルギーの影響で予定よりはるかに多くの「勇者」様にこちらに来ていただくことになりました。そのために当初三人の従者を皆様にお付けする予定でしたが、従者は二人までとさせていただきます。その代わり、戦闘の結果、もしくは皆様の命令によって従者が使用不能になるか死亡した場合は、すぐに替わりの従者を支給いたします」

従者達が青ざめる台詞を平然と言ってのける王女に、眉をしかめる者も中にはいた。

しかし大多数の「勇者」達は、目の前の美女を自分の好きにできる状況に浮き足立っていた。

早くよこせと騒ぎ出す一部の「勇者」へ、王女は冷たい微笑みをくれた。

「焦らずとも、従者は十分な数が用意してあります。潜在能力の高い……皆様の身の内にある魔素の量が多い方から順にお呼びします

ので、それまで静かにお待ちください」

ややうんざりしたような表情が一瞬、王女の顔をよぎる。
しかしすぐに唇を引き結び息をととのえてから、王女は低く何事かつぶやき始めた。
何かの呪文だろうかと皆が気付き始めるころ、「勇者」達に異変が起こった。
全ての「勇者」の頭に被せられた細い金属の環……サークレットという装身具の額のあたりに、指の爪ぐらいの小さな水晶が付いているが、それが王女の呪文に連動するようにキラキラと輝き始める。
光りかたは人によってまちまちで、まともに見ると目が眩むほど輝きが強い者もいれば、まだほとんど光っていない者もいる。

中でもひときわ輝きが強い青年のもとに武装兵が走り、彼を立たせて祭壇へと連れていった。
連れていかれた青年は、最初慌てて不安げにしていたが、祭壇上で王女の恭しい礼を受け、居並ぶ美女の群れの中に導き入れられると、徐々に表情を崩し、ついにはヘラヘラ笑いながらあちらこちらの美女に抱きついたり髪やスカートを持ち上げたりとちょっかいを出して回った。
やがてメロンのような胸の金髪美女を二人、両脇に従えて、青年は笑いながら祭壇の後方にある扉から外へ出ていった。

そうして、水晶の輝きが強い者から順に連れ出され、従者を選ぶ権利を与えられていった。

戦闘力を見込んで男性の従者を選ぶ者も中にはいたが、ほとんどが女性を、それも顔立ちや胸の大きさで選んでいる。
彼らが従者に何を求めているかは明白だった。

……嫌な感じだ。

奴隷市場を連想させる状況に顔をしかめていると、ふいに額が熱くなる。

自分のサークレットが光を放ちだしたと気付いたのは、目の前に無表情な武装兵が立ち、慇懃無礼に頭を下げられた時だった。

従者（後書き）

２０１１年１２月２９日投稿

姉弟

呼び出された順番としてはまだ二十人目くらいだろうか、従者はまだまだよりどりみどりな状態だったが、だからといってはいそうですかと飛び付く気は起きなかった。

先ほどの説明を聞く限り、従者とはほとんど奴隷と同義語……それも使い捨ての扱いだ。

そんな従者を自分が使役するという状態が我慢できないし、なにより自分が他人の運命を選択する立場になるのが嫌だった。

平常であれば美女に囲まれて悪い気はしないけれど……目のやり場に困って視線をさまよわせるうち、ふとひとつの光景が目にとまる。

まだ少女と言ってよい小柄な女性に、大柄な若い「勇者」が絡んでいる。

「勇者」は、少女の身体に申し訳程度に張り付いた布切れの中に無遠慮に手を突っ込んで胸や尻を揉みしだき、少女の耳を舐めんばかりに顔を近付けて、下卑た笑いを浮かべている。

少女は身を捩りながら必死に逃れようとするが、大柄な男の手から逃れきることはできず、涙をこぼしながら耐えていた。

ついに調子に乗った「勇者」が少女を後ろから羽交い締めに押さえ込み、堂々と股間に手を突っ込んだ時、従者のひとりの少年が駆け寄って「勇者」と少女の間に割って入った。

「何しやがる、ガキがっ！」

「勇者」が少年を張り飛ばすと、小柄な身体は軽々と床に吹っ飛んだ。

ようやく「勇者」を振り払った少女が少年に駆け寄ると、二人はひしと抱き合ってお互いを庇い合った。

「やめないか、みっともない」

庇い合う少女たちに蹴りを入れようとする「勇者」を、思わず諌めてしまっていた。

「なんだ？こら、おっさん！」

よく見ると大柄な「勇者」はまだニキビ面の、十代半ばかせいぜい二十歳くらいの若さだ。

「聞いてなかったのかよ？こいつらどうしようが俺らの勝手なんだろうがよっ！」

ニヤニヤ笑いながら悪態を付く彼の顔を平手打ちする。
パチンと乾いた音がして、彼の小さな目が極限まで見開かれた。
親父にもぶたれた事ないのに！とでも言い出しそうな呆け面に背を向けて、庇い合う従者の二人に向き合うと、なんとなく目鼻立ちがよく似ているのに気付いた。

「君たちは兄妹かな？名前は？」

「……はい、私はオリエ。この子は弟でクリオといいます」

まだ怯えた表情ではあるが、少女はまっすぐ見返しながらはっきりと名乗る。

「じゃあオリエにクリオ、私について来てくれるか？」

少女と少年はびっくりした様子でしばらくお互いを見ていたが、やがて意を決したように立ち上がり、力強く頷いた。

「待てこら、おっさん！」

呆け面からさめた「勇者」が食ってかかる。

「こいつらは俺が先に目をつけたんだぞ？あとから来て勝手なことすんな！」

「能力の高い方から順に選ぶ権利があるんだったよな？」

私は近くにいた武装兵を呼び止めて確認した。

兵士は両方のサークレットを見比べ、手元のリストを確認したあと、こちらに笑顔を向けた。

「はい、城之崎隆志さま。あなたの方が潜在能力が高いと判断できますので、この場合の優先権はあなたにあります」

突然フルネームで呼びかけられて驚いていると、若い「勇者」は一瞬眉をしかめ、こちらの顔をじろじろ見たあと、何に思い当たったのかニヤリと口元を歪めた。

「……さっきからどっかで見た顔だって思ってたんだ。城之崎って……」

「勇者」はヘラヘラ笑いを貼り付けたまま、人差し指を突きつけた。

「あんた『切り裂きドクター』だよな？妊婦の腹ぁズタズタにかっさばいて殺した医者！」

……かつて、マスコミにつけられたあだ名が、まさか異世界にまでついて来るとは。

従者選びの最中の他の「勇者」達も一斉に振り返ってくる中、私は手足がジワリと冷えていくような感覚にとらわれていた。

姉弟（後書き）

２０１１年１２月２９日投稿

契約

従者を選んだ「勇者」は、祭壇の後ろの扉から奥の間に通される。そこには神官と思しき人物が数人、各々両脇を武装兵に守られながら立っていて、何かの儀式を行っていた。

私もその中のひとりの神官に手招きされ、従者の姉弟と共に歩み寄った。

神官は従者達を呼び寄せ、小さなナイフで二人の指先を軽く突く。

「おい、何を…！」

私の抗議は武装兵に止められた。

姉弟の指先に待ち針の頭ほどの小さな血の珠が浮かぶと、神官は手のひらに載るくらいの銀色の環を二つ取り出して、それぞれの血の珠に押し付け、何事か呪文らしきものを呟いたあと、今度は私の額の前に銀色の環をかざした。

再び呪文が唱えられると、先ほど王女の呪文を聴いた時のように私の額が熱くなり、目元が眩しくなる。

サークレットの魔晶石が呪文に反応して光っているのだろう。

眩しさを我慢して目をあけて見ると、かざされた銀の輪にも小さな水晶がはめ込まれており、従者達の血液に濡れたまま鈍く輝きを放っていた。

やがて輝きが収まると、神官は二つの環を従者達の首にそれぞれ装着した。

「これにて従属の儀は終了です。魔晶石の契約によりこれ以後、このふたりの従者は勇者様の命に逆らうことは出来ません。万一、従者達が逃亡を図ろうとしても、勇者様が念じればどこにいるか感じ

取る事ができ、いつでも呼び戻す事が出来ます」

これが王女が言った魔道具による支配……さしずめ魔晶石はコントローラー兼ＧＰＳというところか？

思わず自分のサークレットに触れ、外してじっくりと見る。
さしたる装飾もない幅１ｃｍ程度のシンプルな金属の環の一部がひし形にふくらんだ真ん中に、爪ぐらいの大きさの無色透明な水晶が嵌っている。
これも魔晶石。
呪文の名残だろうか、時折輝きを強める以外は普通の宝石にしか見えないが、この石に働きかけることにより様々な魔法の効果がもたらされるのだ。
このサークレットに異世界の言葉の翻訳機能があるのは、救助船の上ですでに気付いた。
実際、サークレットを外した今は、目の前の神官が話す言葉はまったく理解出来ない。
先ほどの王女の説明では、魔素とかいうエネルギーを魔法に変換する機能があるという話だった。
そして従者という名の奴隷を従属させ、位置の確認までできる。
今までの流れからみて、魔晶石に働きかけることでさらにいろいろな効果を付け加えられるのであろうことも想像がつく。

やはり異世界……今まで慣れ親しんだ世界とは異なる法則に司られた世界に来てしまったのだと納得せざるを得ない。

神官の身振りが大きく、口調が険しくなってきたのでサークレットを頭に戻すと、あとがつかえているから早く次の間に移動しろと怒鳴られていた。
無理もない。神官らはこの後、同じ作業を千回は繰り返すのだから。

不安げな表情のオリエとクレオを連れて今更ながら足を速めると、次の間の前で兵士に止められた。
次の間には「勇者」だけが入る。従者は先に新しい宿舎へ行き支度を整えるように、と。

部屋の番号が書かれているのであろう割り符を渡されて、追い払われるように連れていかれるオリエ達を見送る。
どこの誰とも解らない中年男の従者にされたオリエ達も不安だろうが、魔法などマンガやゲームの中でしか見たことのないものがまかり通る世界に放り込まれた自分だって十分怖い。
現代日本で散々理不尽な目に合わされ、何度も死にたい、この世から消えてしまいたいと考えていた身ではあるが、それでもやはり次に何が起こるか予測のつかない状況は怖くてたまらない。

次の間に入ろうと歩き出した足元を、可聴域すれすれの揶揄が引き留める。

……あれが例の『切り裂きドクター』だぜ？

ちらりと振り返った先で、さっき召喚の間で平手打ちしてやった「勇者」が、同じぐらいの年頃の「勇者」数人とニヤニヤ笑いながらこちらを指差している。

……妊婦殺しが偉そうに……

もう、慣れたと思っていたけれど……
さすがにこんな異世界までは追って来ないと思っていた汚名が、執拗にまつわりついて来ているとわかった今は。

踏み出す足が、すくむ。

それでも生きのびてしまったからには、生きねばならない。
そして、この異世界で生きのびるには、今は「勇者」となるしかない。

入り口の兵士に促されるまま、私は次の間に足を踏み入れた。

契約（後書き）

２０１１年１２月３０日　投稿

条件

次の間は階段教室のような小ホールになっており、そこに５０人ほどの「勇者」が詰め込まれた。
教壇にあたる場所には初老の神官が立ち、ホールがいっぱいになる頃合いを見て口を開いた。

「勇者様方、お疲れのところ申し訳ありませんが、この国で生きるために必要な基礎知識を、ただいまからご教授いたします。心してお聞きください」

申し訳ないなどとは欠片も思っていない表情の神官は、この国の基礎知識とやらを機関銃の勢いで説明し始めた。

この世界には３つの大陸があり、各大陸ごとに異なる政治体制の国家が存在している。
今いる聖王国は、最も大きな大陸と周囲の多数の島を支配しており、国教である聖教会はこの世界で最も多くの信者を持つ宗教である。
聖王国内は明確な身分制度があり、約１割弱の王族・貴族が９割以上の平民を支配している。
そして各身分ごとに宗教指導者がいて神の教えに従い人民を導いている。
魔法に関する諸問題についても聖教会が管理しており、常時魔法を行使できるのは神官と王族・貴族がほとんどで、平民は魔法が使えないのが普通である。

その代わり、魔法が使えない平民には、灯りや火を起こすなど簡易な魔法なら使用できる魔道具を聖教会が支給しているので、聖王国の文明度は世界でも群を抜いて進んでいる。

現在、世界中の魔素を食い荒らす魔獣達は、大陸の北部の森林地帯を中心に増殖しており、北部の村などでは魔獣に襲われるなどの人的物的被害が起きて、すでにいくつかの村はやむを得ず放棄するに至った。
一部の魔獣は聖王都の周囲にまで出没し、都市間の流通にも支障をきたしている……等々。

神官は淡々と口頭で説明するだけで、途中数人が質問を投げかけても完全に黙殺された。
黒板のようなものもなく、当然レジュメや図解もなく、メモなどとらせてもらえないから、とにかく言われた通り記憶するしかない。
昔受けた医学部の集中講義のようだとなんとなく懐かしい気もするが、内容が内容だけに聞き漏らしが許されない緊張感は半端でない。

それでもやはり気付いた事もある。
説明されたことより説明されなかった事柄に、つい気が回ってしまうのだ。

まず、聖王国以外の国や聖教会以外の宗教の情報は、明らかに避けて通られている。
他国にも当然魔獣の被害はあるはずだが、それについても説明はない。
それに、枯渇すれば世界が滅びるという魔素についてもあまり具体的な話しはない。
このまま行けばあとどのくらいで枯渇すると考えられているのか、魔道具で消費されるという聖王国国民の魔素消費ペースはどのくらいなのか。
魔素の減少を食い止めるために、勇者を召喚する以外に聖王国国民が何か努力している事はあるのか……等々。

特に魔素に関する質問は、神官のヒステリックな叫びによって完全に黙殺された。

最後に、度量衡と通貨単位について簡単な説明が済み、神官がさっさと部屋を出ていこうとした時、私の斜め後ろにいた女性が神官に駆け寄って発言した。

「召喚はどうやって行ったんですか？私達はいつ元の世界に帰れるんですか！？」

出て行こうとする神官を遮って詰め寄る女性を、すかさず武装兵が羽交い締めにする。

それでも女性は噛み付くように質問を止めない。

「いつ帰してくれるの？早く私を元の世界に、子供のところに帰してっ！」

神官は酷薄とも言える笑いを浮かべて女性を見、軽く舌打ちをすると、ホールを振り返ってうんざりした表情で片手を上げた。

「……召喚は、異世界との境目に強い魔力をぶつける事によって亀裂を作り出し、ふたつの世界を直接繋いで感受性が高い個体を魔力で引き寄せるものだ。空間を直接繋ぐのだから、理屈の上では人や物の行き来は可能。やろうと思えば同じ手段であなた方を帰してやれんこともない」

元の世界へ帰れる可能性について言及された瞬間だった。

ホール内に初めて安堵の気配が流れた。

ところが、

「しかし、それには強力な魔力が必要になる。当然かなりの魔素を

消費するから、召喚直後で魔素の減少した今は当面無理だな。あなた方が魔獣を倒し、世界が安定する程の魔素を取り戻してくれた後なら、可能性はあるかもしれん」

元の世界に戻りたいならせいぜい頑張って魔獣を倒せと言わんばかりに神官は笑った。

「ただ……魔素が回復し、再び異世界への扉が開いたとして、あなた方全員が帰れるとは限らないがな」

どういう意味だ？

「召喚された人間にはそれなりに理由があってな。空間が繋がり強い魔力で呼んだところで、召喚できない人間はどうあっても召喚出来ぬ。あちらの世界に留まろうという強い意志のあるものは、けしてこちらの世界には呼び寄せられないものだ」「逆に言えば、召喚された人間というのは、あちらの世界に留まろうという意志が希薄な者ということだ。あちらでの人生に意義を見いだせない者、あちらでの人生に絶望した者、たとえ居なくなっても惜しんでくれる者が誰もいない者……そういう人間ほど召喚され易いものだ」

心当たりがあるだろう？とばかりに神官が見渡せば、誰もが苦々しく視線を落とす。

一度、帰還の可能性に沸き立ったあとだけに、ホールの静まり返る様は耳鳴りがするほどだ。

「……しかし、ものは考えよう。あちらに未練がないなら、そのぶんこちらで思う存分戦って勇名を馳せ、富と名誉を手に入れることもできる。あちらへの帰還を目指すも良し、こちらでの栄耀栄華を求めるも良し。すべてはあなた方の心掛けひとつだ」

この後、昼食を挟んで午後はいよいよ剣と魔法の実践訓練があると告げて、神官は忌々しげにホールを出ていく。

神官に食い下がった女性は、武装兵が手を引いた途端、力無く床にくずおれていった。

条件（後書き）

２０１１年１２月３１日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5559z/

命ある全てのもの達へ

2012年1月1日00時46分発行